

## 日本語学校に在籍する外国人留学生の「進路希望」とその特徴

阿部(董) 夢(愛知淑徳大学)

### 1. 研究の背景と目的

日本では近年、「外国人留学生」(以下、留学生)が年々増加している。特にベトナム人やネパール人を中心として、日本語学校に在籍する留学生が2012年から2019年にかけて3.3倍に増加したことが大きな要因となっている。当然のことながら、日本語学校の留学生の多くは大学進学後、日本での就職を夢に描いている。しかしながら、日本語学校でなされる進路指導は主に「進学指導」であり(吉村, 2010)、大学合格という短期目標が掲げられる一方で、進学後に大学で何を学び、将来のキャリアをどう考えたらよいかという「キャリア教育」の視点が進路指導から抜け落ちる傾向にある。他方で、非漢字圏留学生の急増により、現場の日本語教師からは「日本語の習得が遅く、初級を繰り返し学習する学生が増加した」ことに加え、「学習意欲が低い上、受け身の姿勢の学生」や、「そもそも目的意識の低い学生が多く、進路相談で苦勞する」といった、学習者の動機や学習態度、進路指導についての困難が指摘されるようになった(嶋田, 2014)。また、かれらの多くは同じ出身国の友人どうしが集団で特定の日本語学校に入学し、就職希望が強いにもかかわらずスムーズに就職できなかつたり、あるいは日本語が上達しないまま日本語学校の系列校である専門学校や大学へと進学することで就職時期を延期するだけで、いずれ「就職難民化」する危険性もともなっている。留学生の就職が注目を集めている今だからこそ、「キャリア」の視点を取り入れた留学生の進路指導が求められるのではないだろうか。

一方、日本語学校に在籍する留学生に関する従来の研究を概観すると、進学問題の研究蓄積は多い。たとえば岡・深田(1995)では、留学生は経済的問題や心理的問題を抱えながらも、日本語学校修了後は日本の大学や専門学校に進学したいという強い進学意志があることが示された。また、日本語学校に通う中国人・韓国人留学生の進路選択自己効力に影響を及ぼす要因や、出身国による特徴などを明らかにした研究もある(村越, 2011)。しかしながら、大学進学後にかれら留学生がどのような進路を希望しているのかといった「キャリア」の視点は不足している。村越(2011)も述べるように、日本語学校は留学生にとって出発の場所であり、「日本進出の窓口」でもある。それゆえ、多様な進路希望に対応し、大学進学した後の将来の就職を視野に入れた進路指導を行っていく必要がある。留学生の多国籍化が進むにつれ進路選択も多様化しつつある昨今、まずは日本語学校に在籍する留学生の「進路希望」の特徴を把握することがキャリア教育をふまえた適切な進路指導の第一歩となる。

そこで本研究では、日本語学校に在籍する留学生がそもそもいかなる「進路希望」をいんでいるのか、特に大学進学後の就職・帰国も含む希望をアンケート調査によって明らかにする。その際、特に大きな割合を占める中国・ベトナム・ネパール人留学生を取り上げ、①日本語能力・②最終学歴・③学習態度および社会的スキルの国籍別差異に焦点をあてる。本研究での成果を通じて、日本語学校で学ぶ留学生の特徴をふまえて、留学生の「キャリア」の視点を取り入れた適切な進路指導に対する提言を行いたい。

## 2. 研究方法

本研究では、2019年7月～9月にかけて、愛知県・岐阜県・三重県内の日本語学校6校に在籍する学生にアンケート調査を実施した。調査票は、対象者の国籍に配慮して日本語や英語のほか、中国語・ベトナム語・ネパール語で用意した。回答総数は1,078名であった。性別未回答者を含めて男性567名(52.6%)、女性498名(46.2%)とやや男性が多くなった。国籍別ではベトナムが351名(32.6%)と最多であり、ネパール(244名、22.6%)と中国(148名、13.7%)など計23か国にわたっている。そのうち在留資格「留学」の保有者は997名であった。

本研究では、「留学」の在留資格をもつ回答者のうち、上位3か国の中国(131名)・ベトナム(329名)・ネパール(237名)人留学生計697名を分析対象にした。697名中、2019年度の修了予定者は419名、2020年度は260名である。最終学歴は高校卒(493名)がもっとも多く、専門学校卒(46名)、短期大学卒(37名)、大学卒(104名)、大学院卒(7名)であった(無記入が10名)。

## 3. 分析結果

### (1) 日本語力と最終学歴

中国人留学生の日本語能力は、「日本語能力試験(JLPT)」のN1とN2レベル取得者が3割弱を占めて比較的高く(図1)、最終学歴も専門学校卒以上が半数にのぼっていた(図2)。反対に、ネパール人は大半がN4以下であり、最終学歴も高校卒が多かった。ベトナム人はN3取得者の割合が高く、学歴でも中間的な社会階層であるといえる。このように、日本語能力や最終学歴には国籍別に一定の特徴の違いがみられる。

### (2) 学習態度と社会的スキル

「学習態度」とは、留学生自身のもつ学習意欲の高低を測定するために設定された質問項目である。藤原・原口(2019)では、学習意欲や主体的学習といった個人的要因が進路選択自己効力感と正の相関があることが指摘されており、留学生においても「学習態度」がある程度進路希望に影響を与えていることが想定される。本研究では、

「学習態度」を「新しい知識やスキルを習得し、難しくても意欲的に勉強に取り組む積極的な態度」と定義し、藤原・原口が示す「学習意欲」および「主体的学習」の10項目を参考に、「新しい知識やスキルを習得することに熱心なタイプ」、「学校では、授業を熱心に受けている」、「本や情報にはすすんで接したい」、「ほかの学生よりも、優れた知識やスキルを見つけておきたい」、「たとえ苦しくても、自分が成長するため学習したい」、「授業時間以外も、授業を理解するために努力している」、「先生や他の学生とのコミュニケーションを積極的に取っている」の7項目を独自に作成した。

一方の「社会的スキル」は、菊池(1988)による「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル」の定義を参考に「初対面の人に対しても、自己紹介が上手にできる」、「他人と話していて、あまり会話が途切れない」、

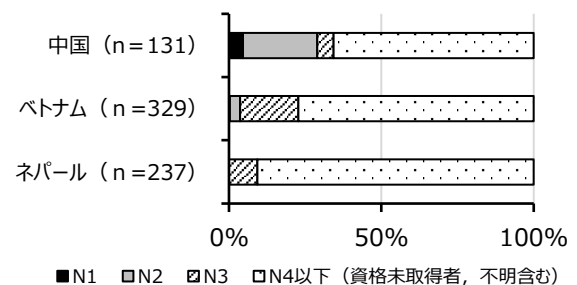


図1 国籍別の日本語能力  
(アンケート調査より作成)

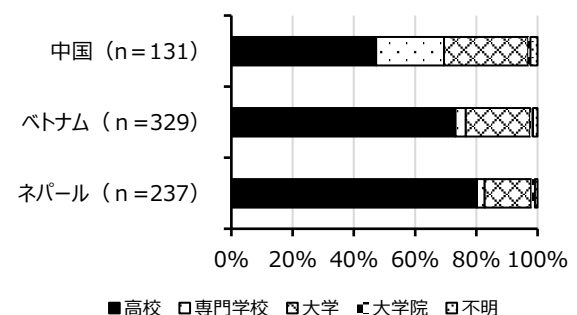


図2 国籍別の最終学歴  
(アンケート調査より作成)

「知らない人でも、すぐに会話が始められる」、「他人が話しているところに、気軽に参加できる」の4項目を設定した。藤澤・原口は、「社会的スキル」が高い大学生ほど積極的な進路選択行動をみせると論じている。これら学習態度、社会的スキルのいずれの質問項目も、回答者の選択ごとに1点としたため、選択数が増えるとそれぞれの得点が上昇する計算である。

学習態度や社会的スキルの点数をみると(表1)、いずれも予想に反してネパール人留学生がもっとも高くなった。一方、学習態度では中国人が最低となり、また社会的スキルはベトナム人がもっとも低くなった。日本語能力や最終学歴(図1、図2)と反する結果となった一因には、質問項目が回答者の自己評価によるため、国籍集団ごとの性格の違いが過度に反映されてしまった可能性が考えられる。たとえば実際に現場の日本語教師に聞き取り調査を行ったところ、ベトナム人は学習意欲は高いが内気な人が多く、日本語会話力が低かったり、授業中の発言も少ない一方で、漢字学習を苦手とするはずのネパール人は全般的に社交的で、コミュニケーション能力も非常に高いという。こうした性格の違いが、結果を左右したのかもしれない。

表1 国籍別にみた学習態度と社会的スキル平均得点

国籍	学習態度	社会的スキル
中国	3.5	1.8
ベトナム	4.1	1.6
ネパール	4.4	2.1

(アンケート調査より作成)

### (3) 日本語学校修了後の進路希望

どの国籍も、日本語学校修了後の大学進学希望者は8割以上にのぼった(表2)。これは、留学生のなかに「第一希望は4年制大学、次は専門学校、それでもダメなら日本留学経験をテコに、帰国して就職」という考え方があからずからであり(久村, 2002)、本研究の結果でも従来の見解に一致した。一方、将来日本での就職を希望する者の割合はネパール人で88.2%(209人)と最多となり、中国人は6割程度に過ぎなかった。このことは中国人の帰国希望者がもっとも高い割合を示し、かつ現時点での進路未定者が2割を超えていることとも矛盾しない。すなわち、大学に進学するかどうかはともかく、日本での就職意欲が一番高いのはネパール人留学生ということになる。特に、日本語学校を修了してすぐに就職したいネパール人は237名中34名(14.3%)もおり(表3)、日本語教師による大学進学前提の進路指導には限界があることが示唆された。また、ベトナム人は中間的性格を有するが、日本語学校修了後すぐの就職希望者がネパール人と同程度に高いため、やはり日本での高い就職意欲が指摘できる。

表2 日本語学校修了後の「進路希望」

国籍	進路希望		大学への進学		いずれは就職		いずれは帰国		進路未定	
	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)
中国 (n=131)	107	81.7	86	65.6	10	7.6	27	20.6		
ベトナム (n=329)	268	81.5	257	78.1	15	4.6	53	16.1		
ネパール (n=237)	195	82.3	209	88.2	9	3.8	18	7.6		

(アンケート調査より作成)

表3 日本語学校修了直後の就職・帰国希望

国籍	進路希望		就職		帰国		未定	
	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)	(名)	(%)
中国 (n=131)	6	4.6%	2	1.5%	8	6.1%		
ベトナム (n=329)	40	12.2%	2	0.6%	15	4.6%		
ネパール (n=237)	34	14.3%	1	0.4%	6	2.5%		

(アンケート調査より作成)

### (4) 学習態度／社会的スキルと就職希望との関係性

最後に、人数規模の大きかった「高校卒」(低学歴)かつ「N4以下の日本語力」(低能力)の回答者に焦

点をしぼり、学習態度・社会的スキルの高低と将来的な「就職希望」との関係性を分析する。図3によると、学習態度の得点が高くなるにつれて就職希望率が高くなっていくのは、ベトナム人留学生だけである。学習態度の良いベトナム人は、将来的に日本への定着も視野に入っていることが示唆された。逆にネパール人では、学習態度と就職希望率はむしろ負の相関関係にあるようである。つまり、在校中から就職を第一に考えているネパール人留学生は、不真面目な学習態度をとる可能性が高い。藤澤・原口(2019)は、学習意欲や主体的学習が高まることで進路選択行動にも正の影響を及ぼすと論じたが、日本語学校の留学生の場合、国籍による特性の違いにも十分配慮する必要があるのではないかと本研究では主張したい。一方、社会的スキルはどの国籍でもおおむね得点の高い方が就職希望率が増すようである。このように、学習態度と社会的スキルは区別して論じるべきであることが示された。

#### 4. 今後の課題

本研究では、日本語学校で学ぶ留学生の進路希望の特徴を、①日本語能力・②最終学歴・③学習態度および社会的スキルに留意しながら国籍別に明らかにすることができた。この分析結果は、今後日本語学校で留学生の進路指導を行う際、とりわけ将来のキャリア形成を意識した指導に有意義な基礎資料を提供しうる。数年後には日本の労働市場を担う人材になるはずのかれら留学生にとって、出発地点となる日本語学校でのキャリア教育がますます重要になってくるだろう。ただし、本研究にはいくつかの課題も残されている。まず、アンケート調査票には将来就職を希望する業種や働く場所等に関する質問項目も設けたが、紙幅の関係で入れられなかった。また、国籍・学歴・日本語能力以外に、出身国での職歴と進路希望との関係性にも言及することはできなかった。今後は、現場の日本語教師や留学生自身にもインタビュー調査を行い、日本語学校の進路指導や外国人留学生のキャリア教育の在り方を追究していきたい。

#### 引用・参考文献

- 岡 益巳・深田博巳(1994)「中国人留学生と就学生の意識」『岡山大学経済学会雑誌』26-1, pp. 1-28  
 菊池章夫(1988)『思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル—』川島書店  
 嶋田和子(2014)「非漢字圏学習者に対する日本語指導法—学ぶこと・教えることの抜本的な見直し—」『ウェブマガジン留学交流』2014年12月号 Vol. 45, pp. 1-16  
 藤澤広美・原口恭彦(2019)「大学生の進路選択自己効力感と学習との関連—社会的スキルの媒介効果に着目して—」『キャリア教育研究』第37巻第2号, pp. 23-34  
 村越 彩(2011)「日本語学校に通う学生の進路選択自己効力に影響を及ぼす進路サポーター—中国人学生と韓国人学生の特徴—」『異文化間教育』34, pp75-89  
 吉村淳代(2010)「大学院進学クラスにおけるキャリアデザイン教育の必要性—研究計画書の作成に生かすために—」『独立行政法人日本学生支援機構日本語教育センター紀要』6, 23-32

謝辞：本研究は、日本キャリアデザイン学会2019年度奨励研究による成果の一部です。調査にご協力いただいた日本語学校の教職員ならびに留学生の皆様には、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

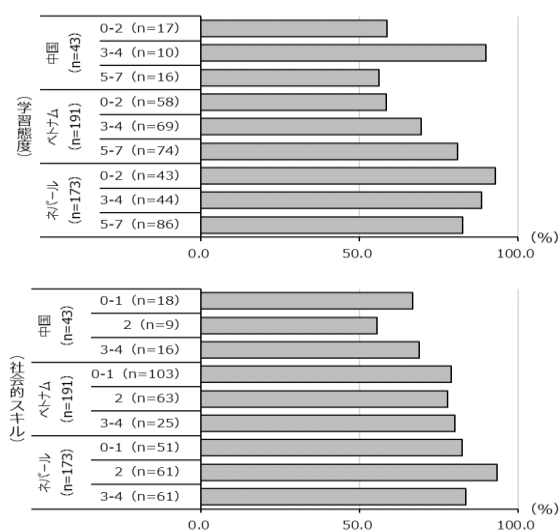


図3 学習態度/社会的スキルと就職希望 (アンケート調査より作成)